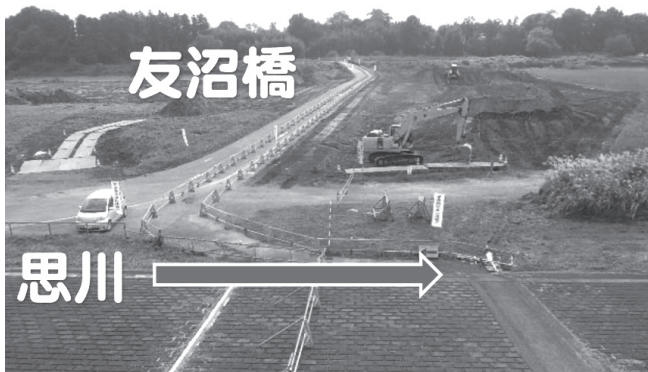


川西地区水防拠点整備事業の進捗状況



▲川西地区水防拠点整備事業の河道掘削状況 10月18日(月)川西地区側から友沼橋方面を撮影

現在、川西地区で行われている水防拠点整備事業は、洪水被害を最小限とし、災害時の緊急復旧活動を行う上で必要な土などの整備を行うとともに、災害時の活動拠点となるなど有効な施設です。

また、公園、防災訓練や防災教育の場としての活用など、平常時の利活用を推進することで、地域の賑わいづくり及び防災に対する意識向上を図ることに繋がります。

現在、車両通行止めの通行規制等のご不便をお掛けしておりますが、皆様のご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

問事業に関すること

国土交通省 利根川上流河川事務所 ☎ 0480(52)3952

工事に関すること

国土交通省 利根川上流河川事務所 古河出張所 ☎ 0280(22)0487

広報連絡委員レポート№.427



野木町の民謡

広報連絡委員 渡邊 孝善

昭和30年代から40年代、東京では「民謡酒場」という酒場が数多くありました。当時は高度経済成長期、地方から東京に集団就職等で上京した人達が、懐かしい故郷の唄と言葉を求め通った場所でした。

昭和40年代後半、私も先輩に連れられ当時有名店だった浅草の「和ノ屋追分」に何回か行きました。そこで、栃木県の民謡を歌えと言われ「日光和楽踊り」、「八木節」を歌った記憶がありますが、それ以上の県内の民謡は知りませんでした。

現在、桑に関係する仕事をしていますので、かつて養蚕業の集積地であった野木、小山地区の養蚕業の歴史を調べていましたところ、隣の生井地区には「生井の桑摘み唄」という民謡があることを知りました。

その民謡は、蚕の餌である桑の葉を皆で摘む時に歌われていました。労働歌で明るい歌ではありませんが、当時の辛い農作業を、皆で歌いながら乗り越えてきたのだと思います。

隣の地区に民謡があったからには、野木町にもあったのではないかと思い古文書を紐解きましたところ、ありました。

昔の農作業は全て人の手で行われ、繰り返しの作業を何時間も続けることから、歌で疲れを癒していたといわれます。その時の唄として、「麦打ち唄」、「草刈り唄」、「お茶つみ唄」、蚕から繭になり、その繭から糸を引く作業の時に歌われたという「糸ひき唄」、「土はつき唄」(ドハツキとは、土をつき固めるという意味で、思川や渡良瀬遊水地の堤防を作るときに歌われた唄)などです。栃木県内で多く唄われていた田植唄を、野木町の歴史が書かれた古文書には見られません。

これは、当時、田仕事があまりに行われず、どちらかというと畑仕事や養蚕が盛んであったことと関係があるようです。また、祭りや祝の席で歌われた「神輿もみ唄」、「孫祝い唄」、「門付唄(厄払いの唄)」、さらに、遊びの時に歌われた「まりつき唄」、「羽根つき唄」なども記録に残されている野木の民謡です。

当時の辛い農作業等を、歌で乗り越えてきた野木の先人の方々、これらの民謡を歌い継いでいくことも、野木町文化の継承になるのではないのでしょうか。